

次の驛で直ぐ新吉は降ろされた。

深夜のシト、な町を、二人の巡査に護られて新吉は警察へ引き立てられた。

寢て居た宿直の巡査や、刑事が四五人集つて来て、廣島の巡査は二人ともお頼みますと言つて歸つた。

其處で角火鉢を圍んで、部長か何かと新吉に訊問を初めた。

新吉も椅子に掛けて、足をあぶつたり器丸をあぶつたりした。

「俺は下關までの切符を持つてゐる。それに幾度となく途中下車を命ぜられて、何の理由もなしに旅程に對する俺の行動は滅茶苦茶に破壊された」

と云ふのが新吉の言ひ分だつた。

「兎に角眞言宗のお寺も此の近所にもあるが、君は觀音經をあまり放外な聲でやり過ぎる。君の風體からして他人を吃驚させちゃ不可ない」刑事が言つた。

新吉はそれから何うしたか忘れて了つた。

其の夜其處の警察にねたのだらうか。